

るところであろう。1時間の授業の中にいくつ  
か考えられる高いヤマ場、低いヤマ場のそれぞ  
れに、その高さに応じた児童を対応させ、そこ  
で個を認める働きかけを行うことが考えられる。  
そして、ときには、特定の児童の個を認めるた  
めのヤマ場を、授業の中に作ってやることも必  
要であろう。

このように、1時間の授業の中に、個を認め  
るヤマ場を考える、ということになれば、教師  
は、児童一人一人の実態を十分に把握し、さら  
に教材に十分精通していなければならないであ  
ろう。つまり、児童一人一人の実態を十分に把  
握し、教材に十分精通していないと、個を認め  
る場の設定はできない、ということである。

われわれは、この研究を推進する中で、児童  
の実態の把握と教材研究の大切さを、改めて認  
識したのである。そして、それは、当然の帰結  
なのかもしれない。